産学連携によるプロジェクト型インターンシップの実践と効果
－学生の社会的スキル・社会人基礎力の観点から－

鍛島秀明、辻文、神原知佐子、杉山寿美、藤井保、谷本昌太（健康科学科）

Practice and Effect of Project-based Internship through an Industry-University Cooperative:
From viewpoint of Student's Social Skill and Fundamental Competencies for Working Persons

１．はじめに

県立広島大学人間文化学部健康科学科（以下、本学科）では、その人材育成の目標として「真に豊かで健康な人間生活の実現、長寿社会におけるクオリティ・オブ・ライフの向上、生涯にわたる健康の維持と増進、さらには心身の調和的発達の実現に、他者と協働して主体的かつ積極的に取り組む人材の育成を目指す」を掲げている。本学科ではその目標達成に向けて、教育課程の学修のみならず、「教育課程外（正課外）学修」においても学生の主体的な学びを促す取組を積極的に支援してきている。本稿では、産学連携の下、正課外学修として１年目の取組を開始し、２年目には正課内「インターンシップ」として継続的に取り組んできた Calbee Future Labo「新商品開発プロジェクト」の実践内容を概説し、その過程で培われた学生の社会的スキルおよび社会人基礎力について考察する。

用語の定義
※社会的スキル：対人関係を円滑に運ぶために役立つ技能・能力

２．Calbee Future Labo とは

Calbee Future Labo（以下、CFL）は、カルビー株式会社における新商品開発の一部門であり、カルビー創業の地である広島を拠点としている。CFL では、商品企画から製造・販売に至るまで、企業や団体等と協同で商品開発を行っている。CFL が掲げる商品開発の理念は、「圧倒的な顧客志向」であり、顧客ニーズの把握を商品開発の中核として位置づけている。2016 年からの３年間に３つのヒット商品の開発を目指しており、2018 年３月には、その第１弾商品として「ふるシャカのりしお味」を開発・市場販売している。

３．「新商品開発プロジェクト」における学生のミッションおよびその実施概要

前項で述べたように、CFL における商品開発の礎は顧客ニーズである。したがって、学生に課せられたミッションは、新商品開発の糸口となる顧客ニーズの把握であった。具体的には、10～60 歳の広範な生活者を対象に、１週間分の生活記録をインタビュー形式により調査・分析し、新商品開発の企画発表を行うことであった。インタビューによる調査期間は、2016 年 10 月から 2017 年８月までの 10 ヶ月間であった。本学科に所属する３年次生 37 名（男子学生３名を含む）の内、15 名（男子学生１名を含む）が新商品開発プロジェクトに自主的に参加した。

インタビューの方法については、CFL スタッフから十分な説明が行われた。学生はインタビューの対象者に対して、CFL から提示されたインタビュー用紙（資料 1）を事前に配付し、１週間分の

生活記録の概要を記入するように依頼した。学生はインタビュー用紙を回収した後、インタビューの当日までに対象者の生活記録を確認し、年齢、職業、世帯人数、対象者の行動パターンを分析し、質問事項の整理、対象者の人物像をイメージする等の事前準備を行った。インタビューは学生と対象者の２名で行われた。インタビュー１回当たりの時間は約 30～45 分とした。各回のインタビュー終了後、学生は直ちにその内容を専用シートに入力し、報告書として CFL スタッフに提出した。後日、学生は CFL スタッフと面談し、インタビュー内容の振り返りを行った。インタビューの総数は 445 件（１人当たり 29.7 件）であった。調査終了の１ヶ月前に、15 名の学生は４グループ（１グループ当たり３～４人）に分かれ、インタビュー結果の分析、顧客ニーズの把握、新商品の企画・立案を行った。2017 年８月中旬に、インタビューの結果・成果に基づく新商品企画コンテストが CFL オフィスにおいて開催された。学生は、CFL スタッフならびに県立広島大学の教職員に対し、グループ単位で企画・立案した新商品案をプレゼンテーション形式で発表した。

４．「新商品開発プロジェクト」における本学科教員の取組（実施体制の整備、学修支援）

本学科の教員は、チューター教員を中心に CFL スタッフとの調整、学生への対応を行った。また、2017 年２月からは学外でのインタビュー活動開始にむけて、その活動を安全かつ円滑に実施できるよう、事務局総務課、教学課の協力を得て、CFL スタッフと共にガイドライン（実施条件、実施方法、留意事項）を作成し実施体制を整備した。具体的には、学科担当教員に「インタビュー実施予定を事前連絡すること」、「インタビュー終了後、報告すること」、「１週毎にインタビューの実施件数を報告すること」等である。このガイドラインにより、担当教員の業務は多くなるものの、インタビューの実施件数が少ない学生に対する面談を適宜実施することや、報告書作成までの一連の作業が不可能な予定を立てている学生への声かけなど、学生が達成可能な目標にむけた支援が可能となった。加えて、2017 年４月には、この活動を「インターンシップ」として教育課程内の取り組みとするために学科内に「学科インターンシップ支援委員」を組織し、学科としての支援体制を明確化した。学科インターンシップ支援委員は、新商品企画コンテストのプレゼンテーションにおいては、学生が作成したパワーポイントおよび原稿の確認を行い、また、テレビ取材時等の学生指導を行った。併せて、学生・CFL スタッフ・学科教員間の信頼関係を醸成するために、お菓子パーティーの開催、本学科の学生実習（給食経営管理実習）の中で実施する昼食提供に CFL スタッフを招待する等の取組を行った。

NO.

インタビュー日付 ／　　インタビュアー

お名前　　※略名、呼び名、あだ名も可

この度は、当アンケート記載およびインタビューにご協力いただき、ありがとうございます。

みなさんの生活の様子から**お菓子だけでなく、どんな商品があったらいい**かを検討してまいります。

年齢　　職業

あなたの1週間の生活の様子を下記にご記いただける範囲でご記載ください。※書き方は裏面をご参照ください。

性別　　同居者

	月曜日（ / ）		火曜日（ / ）		水曜日（ / ）		木曜日（ / ）		金曜日（ / ）		土曜日（ / ）		日曜日（ / ）	
	スケジュール	食事時刻（時）	スケジュール	食事時刻（時）	スケジュール	食事時刻（時）	スケジュール	食事時刻（時）	スケジュール	食事時刻（時）	スケジュール	食事時刻（時）	スケジュール	食事時刻（時）
0:00			0		0		0		0		0		0	
1:00			1		1		1		1		1		1	
2:00			2		2		2		2		2		2	
3:00			3		3		3		3		3		3	
4:00			4		4		4		4		4		4	
5:00			5		5		5		5		5		5	
6:00			6		6		6		6		6		6	
7:00			7		7		7		7		7		7	
8:00			8		8		8		8		8		8	
9:00			9		9		9		9		9		9	
10:00			10		10		10		10		10		10	
11:00			11		11		11		11		11		11	
12:00			12		12		12		12		12		12	
13:00			13		13		13		13		13		13	
14:00			14		14		14		14		14		14	
15:00			15		15		15		15		15		15	
16:00			16		16		16		16		16		16	
17:00			17		17		17		17		17		17	
18:00			18		18		18		18		18		18	
19:00			19		19		19		19		19		19	
20:00			20		20		20		20		20		20	
21:00			21		21		21		21		21		21	
22:00			22		22		22		22		22		22	
23:00			23		23		23		23		23		23	

資料１　１週間の生活記録用紙

５．社会的スキルおよび社会人基礎力の評価方法

５－１．社会的スキルの評価

評価対象となる学生は、本学科に所属する３年次生 37 名であった。アンケート実施の目的や概要、倫理的配慮について十分に説明し、同意が得られた学生に対してのみ、無記名自記式のアンケートを実施した。本アンケートは、プロジェクトを終えた２ヵ月後、すなわち、2017 年 10 月に実施した。社会的スキルの測定には、菊池[(1)]によって開発された Kiss-18（Kikuchi’s Scale of Social Skill-18 items）を用いた（資料２）。Kiss-18 は、信頼性および妥当性の検証がすでに確認されており、広く汎用されている社会的スキルの評価尺度で、18 の質問項目で構成されている。下位尺度は、①基本的スキル［自己紹介・会話の継続など（項目１、５、15 の得点の和）］、②より高度なスキル［依頼・謝罪（項目２、10、16 の得点の和））］、③感情処理スキル［自制心・感情表現（項目４、７、13 の得点の和）］、④攻撃に代わるスキル［他者とのトラブル処理・他者の援助など（項目３、６、８の得点の和）］、⑤ストレス処理のスキル［矛盾した情報の処理・集団圧力への対応など（項目 11、14、17 の得点の和）］、⑥計画のスキル［問題発見・目標設定など（項目９、12、18 の得点の和）］の６つの下位項目から構成されている。「いつもそうでない」～「いつもそうだ」の５段階評定とし、得点が高くなるほど社会的スキルが優れていることを意味する。なお、Kiss-18 は、あくまで回答者自身が認知している社会的スキルであり、社会的スキルの客観的評価を意味してはいない。

５－２．CFL スタッフによる社会人基礎力の評価

CFL スタッフによる評価は、CFL が独自で作成した評価項目に基づいて「社会人基礎力の評価票」

で行われ、その評価と総評（コメント）がプロジェクトの終了時に CFL スタッフから個人面談の形でフィードバックされた。社会人基礎力の評価票は、「事前準備」、「インタビュー」、「報告書作成／レビュー」の大項目からなり、各大項目は、さらに中項目、詳細に区分されている（表２）。そして、それぞれにより、身につく力が、「ビジネス基礎力」、「コミュニケーション力」、「考える力」として示され、難易度が「高難度（A）」、「中難度（B）」および「低難度（C）」の３段階で示されている。項目ごとの評価は、「できている（○）」、「できているが改善の余地あり（Δ）」、「もう一歩（×）」に分類されている。

５－３．分析方法

Kiss-18 を用いて評価した社会的スキルの得点は、全て平均値 ± 標準偏差（Standard Deviation; SD）で示した。CFL に参加した学生と不参加の学生の得点差の判定には、対応のない *t* 検定を用いた。統計解析ソフトは、SPSS 18 statistics software を用い、有意水準は全て危険率５％未満とした。

以下に示してある 18 項目について、「いつもそうだ＝5」「たいていそうだ＝4」「どちらでもない＝3」「たいていそうでない＝2」「いつもそうでない＝1」の 5 つの選択肢のうちどれにあてはまりますか。すべての項目について、この 5 段階で回答してください。

1.他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか　（　　）
2.他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか　（　　）
3.他人を助けることを、上手にやれますか　（　　）
4.相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか　（　　）
5.知らない人でも、すぐに会話が始められますか　（　　）
6.まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか　（　　）
7.こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか　（　　）
8.気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか　（　　）
9.仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか　（　　）
10.他人が話しているところに、気軽に参加できますか　（　　）
11.相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか　（　　）
12.仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか　（　　）
13.自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか　（　　）
14.あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか　（　　）
15.初対面の人に自己紹介が上手にできますか　（　　）
16.何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか　（　　）
17.周りの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか　（　　）
18.仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか　（　　）

資料２　社会的スキル尺度：Kiss-18（18 項目）

６．結果

社会的スキルの評価における質問紙は 37 名に配付され、全ての対象者が全項目に回答した（有効回答率 100%）。37 名の対象者の内、CFL 参加者は 15 名（参加群）、不参加者は 22 名（非参加群）であった。全対象者の社会的スキルの総得点の平均点は 59.4 ± 14.1 であった（表１）。下位尺度の平均点は基本的スキル 9.9 ± 3.0、より高度なスキル 10.5 ± 2.4、感情処理スキル 9.6 ± 2.5、攻撃に代わるスキル 9.8 ± 2.5、ストレス処理のスキル 9.8 ± 2.9、計画のスキル 9.6 ± 2.9 であった。参加群の社会的スキルの平均点（72.2 ± 8.8）は、非参加群のそれ（50.6 ± 9.8）に比べて 20 点以上高値であった。下位尺度においても同様に、全ての項目において、参加群は非参加群に比べて 3.0 から 4.5 点高値であった（表１）。

CFL スタッフによる社会人基礎力の評価では、アンケート実施件数が多い学生ほど、高・中難度の項目に対して、「できている」もしくは「できているが改善の余地あり」と評価される学生が多い傾向が認められた（表２）。学生に対する CFL スタッフのコメントでは、項目毎の結果に基づいて、インタビューにおける改善点や解決策、学生のしぐさに至るまで詳細に総評された。

表１　Kiss-18 による社会的スキルの評価結果

	参加群（15 名）	非参加群（22 名）	全体（37 名）
総得点*	72.2 ± 8.8	50.6 ± 9.8	59.4 ± 14
基本的なスキル*	11.9 ± 1.8	8.5 ± 3.1	9.9 ± 3.0
より高度なスキル*	12.5 ± 1.7	9.2 ± 1.9	10.5 ± 2.4
感情処理スキル*	11.4 ± 2.0	8.4 ± 2.0	9.6 ± 2.5
攻撃に代わるスキル*	11.8 ± 1.7	8.4 ± 1.9	9.8 ± 2.5
ストレス処理のスキル*	12.3 ± 1.9	8.2 ± 2.2	9.8 ± 2.9
計画のスキル*	12.3 ± 1.3	7.8 ± 2.0	9.6 ± 2.9

*: 参加群 vs. 非参加群、$p < 0.05$.

表２　CFL スタッフによる社会人基礎力に関する学生評価とフィードバックコメントの例

大項目	中項目	詳細	身につく力	難易度	評価				
事前準備	◆仕事は段取り，事前準備でほぼ決まる。しっかり準備。				Aさん 43件	Bさん 38件	Cさん 33件	Dさん 29件	Eさん 22件
	理解・確認	シートを読み込み，知らないワードを事前に調べておく。	ビジネス基礎力	C	○	○	○	△	△
	想像	対象者がどのような人物か(どのような生活をしているか)を想像することができている。	考える力	B	○	○	○	△	×
		インタビュー用紙に記されている行動の背景・理由を考えることができている。	考える力	B	○	△	△	△	×
		想定問答を準備することができている。	考える力	B	○	△	△	△	△
	ロールプレイ	インタビュー時間を考慮し，当日の流れや聞くべきポイントを組み立てることができている。	ビジネス基礎力	A	○	△	×	×	×
インタビュー	◆相手のことをどこまで把握できるかがポイント。人となり，価値観をどこまで把握できるか。								
	前提・態度	傾聴，聞く姿勢がとれている。興味をもってインタビューに取り組むことができる。	コミュニケーション力	B	○	○	○	○	○
		対象者に対して，言葉づかいや姿勢など問題がない。	ビジネス基礎力	C	○	○	○	△	○
	イントロ・終わり	挨拶，インタビューの主旨，配慮を伝えることができる。	ビジネス基礎力	C	○	△	△	△	△
		世間話ができる。相手との共通点を見つけられる。相手が話やすい状況をつくることができる。	コミュニケーション力	B	○	○	○	○	○
	日常行動把握	インタビュー用紙の空欄を埋められる(行動の把握)。何をしているかわからない状況をつくらない。	コミュニケーション力	C	○	○	○	○	○
		行動の理由／背景を聞き出すことができる。	コミュニケーション力	B	○	△	○	△	△
	拡大／掘り下げ	アンケート以外の週や過去，未来について質問している。	コミュニケーション力	B	△	△	△	△	×
		当初の想定外の質問ができる(インタビューで聞いたコトから深堀)。	考える力	A	△	△	×	×	×
報告書作成／レビュー	◆相手がどのような人だったか，正確に伝えることができる								
	基礎	インタビューの翌日までに報告書を提出し，1週間以内にレビューを実施することができる。	ビジネス基礎力	C	×	△	×	×	×
		伝わる言葉，表現を使用できる。	ビジネス基礎力	C	○	○	○	○	○
		事実と私見を分けて伝えることができる。	コミュニケーション力	B	○	△	△	△	△
	基本情報	属性，プロフィール，外見などを伝えることができる。	ビジネス基礎力	C	○	○	○	○	○
	事実情報伝達	アンケート用紙の1週間分の行動をまとめて，正確に伝えることができる。	ビジネス基礎力	C	○	○	○	○	○
		相手の発言など事実情報を伝えることができる。	ビジネス基礎力	C	○	○	○	○	△
	インタビューを行う価値	行動の理由を正確に伝えることができる。	コミュニケーション力	B	△	△	△	△	△
		対象者の考え方(価値観)，悩み，思い(例えば，喜怒哀楽)が伝えられる。	コミュニケーション力	A	○	△	△	△	×
		当日感じたコトや情報から相手のニーズを想像・推察できる。	考える力	A	△	△	×	×	×

CFL スタッフによるコメント

A さん：　事前アンケート上の生活はきちんと押さえられていました。過去との比較、今後の展望などより立体的にヒアリングするような意識を持てると尚良いです。自分が想定していた流れにならなかった際に質問フロー変更がうまくいくと尚良いと思いました。項目にはありませんでしたが、インタビュー当日のシミュレーションを複数種できていると変更しやすくなります。たまに話しすぎるときがあり、聞きだすために相手に話してもらうことをより重視しましょう。最後の方は確認していませんが、ペン回しは注意してください。少し報告書をためる傾向がありました。一つひとつ行うこと・インタビュー実施後に早めにレビューをして一緒にニーズを考えることで、次のインタビューに活かせることがあったかもしれません。

７．考察

本稿では、産学連携によるプロジェクト型（Calbee Future Labo「新商品開発プロジェクト」）インターンシップの実践内容を概説し、学生の学修成果として社会的スキルならびに社会人基礎力を横断的に調査した。社会的スキルの得点は、全ての項目で、CFL 参加群が非参加群に比べて高値を示した。定性的ではあるが、アンケートの実施件数が多い学生ほど、社会人基礎力が優れている傾向にあり、社会人として不可欠な能力が本プロジェクトを通じて培われた可能性が示唆された。

インターンシップ（特に、課題解決型）は社会的スキルおよび社会人基礎力の向上に有用な教育プログラムの一つであるという[2-4]。一方、平成 17 年の厚生労働省の調査によると、多くの企業・大学は、インターンシップにおいて学生が高い学習効果を得るためには 1 ヶ月以上の期間が必要であると回答している。つまり、知識の定着および技術の向上には、授業内容に加えて、学習期間も重要な要素であることが伺える。その点、本プロジェクトの期間は 10 ヶ月間に及んだことから、学生は社会的スキルおよび社会人基礎力を習得し、その学びを定着させるには十分な学習期間であったと考えられる。しかしながら、学生の社会的スキルがどのような取組みを通じて向上されたのか、その詳細を説明することは容易ではない。

本プロジェクトにおける学生の主要な取組は「初対面の生活者に対するインタビュー調査」であったことから、この取組が社会的スキルおよび社会人基礎力の向上に有用であった可能性は高い。社会的スキルの基本要因は、自らのメッセージを適切に表現し、他者のメッセージを的確に把握するスキルである。初対面のインタビュー対象者との会話を円滑に進めていくには、その場の状況に応じて、社会的スキルを適切に活用しなければならない。インタビューを開始して間もない頃、大多数の学生は、「何から話しを切り出せば良いのか分からない」、「話が続かない」等、インタビューに悪戦苦闘していた。CFL スタッフは、インタビューを終えた学生に対し、「事前準備をする（相手をイメージする）」、「気持ちのよいあいさつをする（第一印象が大切である）」、「表情を豊かにする（笑顔で楽しそうに）」、「自己開示（自分のことを話してみる）」、「共感（他社との共通点を見つける）」、「外見・しぐさをよく観察する」等、社会的スキルに関わる要素を学生に分かり易く丁寧に指導を行っていた。また、学生もその助言・支援を素直に受け入れていた。10 か月の期間、信頼関係を築きつつ、密接に関わり、助言・評価された経験が、社会的スキルの向上に至ったのかもしれない。Dale（1969）[5]による「経験の円錐」でも指摘されているように、知識の定着は、読む・聞くといった「受動的」な学習よりも書く・話す・やる、のように「能動的」な学習の方が知識の定着率が高いという。本プロジェクトにおける学修はまさしく後者のそれであり、学生のスキル獲得ならびに定着を促す学修スタイルであったと考えられる。

本プロジェクトに参加した学生は、「初対面の生活者に対して、緊張することなく会話ができるようになった」、「自らのスケジュールをきめ細かくチェックし、空いた時間を有効活用するようになった」、「グループワークで積極的に発言できるようになった」等、自らの成長を述べている。CFL スタッフからの評価・コメントに対しては、「社会人基礎力を磨くきっかけとなった」、「就職活動の参考になった」、「自らの長所・短所を知ることができた」と述べている。長期間にわたって社会人と密接に関わり専門科目とは異なる観点から助言・評価された経験、プロジェクトを通じて習得した実践的な知識や技術、主体的に学び続ける態度は、学生にとって貴重な財産になったに違いない。

最後に、本アンケート調査はプロジェクト終了時点のみの結果であるため、本プロジェクトが、学生の社会的スキルおよび社会人基礎力の育成・向上に有用であったか否かを結論付けることはできない。また、社会的スキルや社会人基礎力以外にも、多様な力が培われた可能性がある。したがって、将来的にはプロジェクト型学修の効果を縦断的かつ多面的に評価する必要があるだろう。また、産学連携によるプロジェクト型インターンシップの意義の検証、具体的には、学生の学修成果や成長の可視化に加え、社会への波及効果の検証が不可欠であろう。加えて、産学連携によるプロジェクト型学修の推進に向けて、大学教員に求められる役割（接続・連携調整、学生への指導・助言等）を明確にすることも重要であろう。

謝辞

CFL スタッフの皆様には、学生の活動に対し丁寧なご指導ならびにご支援を継続的にいただきました。また、本報告の公表についてもご了解を賜りました。心より感謝申し上げます。学内では、公立大学法人県立広島大学理事（兼）事務局長 栗栖恭三様、ならびに大学本部職員の皆様方に、インタビュー対象者の開拓に係る県内企業・団体等への依頼、CFL との契約書の締結など、実施環境の整備、ならびに当該活動の広報などにおいて多大なご尽力を賜りました。心より感謝申し上げます。併せて、インタビューを快く引き受けてくださいました皆様、ならびに本報告に係るアンケート調査にご協力くださいました本学科の平成 27 年度生（現 4 年次生）に心より感謝申し上げます。

参考文献

1. 菊池孝夫（1988）思いやりを科学する、川島書店、東京.
2. 真鍋和博（2010）インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響、日本インターンシップ研究年報、第 13 号、9-17 頁.
3. 太田和男（2010）PBL 型インターンシップがエンプロイアビリティに与える影響―文系大学のケース、帝京平成大学紀要、第 2 号、117-129 頁.
4. 柳田純子（2009）産学連携プロジェクトと連動した演習教育によるキャリア形成支援～課題解決型学習に参画した経営系学生のキャリア形成過程の考察～、東京情報大学研究論集、第 2 号、9-25 頁.
5. Dale E. (1969) Audiovisual methods in teaching, third edition. New York: The Dryden Press.